

令和 8 年度 第 1 回恵那市子ども・子育て会議会議録

日時：令和 8 年 8 月 7 日（金） 午後 7 時～

場所：恵那市役所会議棟 大会議室

1. 委嘱書交付

2. 委員長あいさつ

3. 委員自己紹介

4. 議題

（1）恵那市子ども・子育て会議の役割について【資料 1】

（2）恵那市こども計画事業評価【資料 2】

（3）子ども・子育て支援事業計画の進行管理と実施状況【資料 3】

（4）第 1 回ネウボラ会議の報告【資料 4】

（5）今後の子育て支援策について

5. その他

（1）恵那中央出張所運営協議会委員の選出について

（2）恵那市男女共同参画プラン推進委員会委員の選出について

6. 閉会のあいさつ（副委員長）

■進行（事務局）：定刻なので開会する。本日進行を務める子育て支援課長の高橋です。

よろしくお願いします。この会議は、子ども・子育て支援法に基づき平成 25 年度から開催している。市の子ども・子育て支援に関する施策や、子ども・子育て支援事業計画について審議いただく場である。委員の任期は 2 年間で、今年度は 2 年目。

本会議の成立は、恵那市子ども・子育て会議条例第 6 条第 2 項の規定により過半数の出席が必要。本日は委員名簿の 1 番杉山委員、3 番加藤委員、15 番森委員より欠席の連絡を頂いている。18 名中出席は 15 名であり過半数以上の出席があり本会議が成立していることを報告する。

本日の会議は、恵那市附属機関等の会議の公開に関する要綱に基づき原則公開とし、会議録も公開する。

本日の会議終了は概ね午後 8 時半を予定している。

1. 委嘱書交付

■進行（事務局）：今回は 5 名が新しく委員になる。本来 1 人ずつ委嘱書をお渡しするところだが、時間の関係上、席に配布している。

2. 委員長あいさつ

■進行（事務局）：坪井委員長より挨拶を申し上げる。

■委員長：お疲れのところありがとうございます。本当に暑い。7 月 28 日に発生した熊本の大地震、テレビや新聞を見て感じるいろいろなところがある。一番良かったのは、恵那市内の小中学校の体育館全てにエアコンが設置されていること。エアコンのないところがたくさんある。本当に大変なところで作業をやってみえ日々暮らしてみえる。恵那市は 1 月の大雪のときも、串原でどうしようと言ったとき、自動で電気がつくので、エアコンで暖かいところで一昼夜過ごしたということを知った。子どもたちや市民の健康と防災面からも恵那市は早く取り組んだが、全国的には 20% ぐらいしか設置されていない。恵那市では安心して生活ができる。

今まで経済的、精神的支援は子育て支援パッケージに多く組み込まれている。ある程度充実していると感じている。

今日は、ある程度子育てについては一応区切り、今後の展開について皆さんのご意見を伺う。

3. 委員自己紹介

〔 委員・事務局自己紹介 〕

4. 議題

- (1) 恵那市子ども・子育て会議の役割について【資料1】
- (2) 恵那市こども計画事業評価【資料2】
- (3) 子ども・子育て支援事業計画の進行管理と実施状況【資料3】
- (4) 第1回ネウボラ会議の報告【資料4】
- (5) 今後の子育て支援策について

■進行（事務局）：ここからは坪井委員長の進行により会議を進める。

■議長（委員長）：議案 1～4 をまとめて事務局から説明していただき、その後に一括して質疑に入る。

〔 事務局から資料に基づき説明 〕

■議長（委員長）：質問、意見はあるか。

■委員：外国籍の子ども、両親とも外国人で、小さな頃から日本の文化にあまりなじんでいない子、生まれたときから日本に住んでいる子も含め、そういう両親とも外国籍の子はどれぐらいいるか。

■事務局：調べて後で答える。

■議長（委員長）：2 ページ、ライフステージを通した基本目標で、課題のところで、青少年育成推進員の参加率はいかがか。

■委員：資料を先ほど訂正していただいたが、これは青少年育成推進員の参加が低いのではなく、自治会に1人ずつ青少年推進委員がいる地域が多いが、宛て職で、年1回会議に出ればいいようなもので、そういう方たちに年1回研修会をしているが、そういう方たちの参加が少ない。市の推進委員としてはすごく活動してもらっている。会議はたくさん行っている。各地域の代表の推進委員は大変よく動いているが、町内の一人一人が動いていない。昨年度まで自治会推進委員研修会を行っていたが、大井町、長島町は自治会の推進委員がなくなっている。今自治会自体が高齢化等でいろんな役がありすぎて入りたくないという話がたくさんある。大井町では自治会が大井の自治連を抜けた。もう少し大きな地区代表で2、3名ずつ出てもらっている。数年前からそうしている。要は、「町内の青少年推進委員と言われても役割が分からない」ということが大きい。地域の自治会役員が変革期にある。福祉委員、交通安全など役が多くそれをやりたくな

いので、自治会の加入率が低い。人口全体の 57%という区もある。青少年は、自治会推進委員に、研修会などもなく今年度からは市全体の皆さんに向けて、SNS 問題などの研修会を行って、広く皆さんに子どもたちの問題等を分かっていたらこうということだ。しかし、ここで見ると青少年推進委員が参加してないように見えるので、訂正をお願いした。各地域の推進委員は非常によく動いている。

■議長（委員長）：地域、三郷なら三郷の推進委員がいて、推進委員の連絡会が停滞しているということか。

■委員 いいえ、それはやっただいている。もっと小さい単位の自治会。

■議長（委員長）：例えば三郷なら推進委員が集まってマス釣り大会をしてくれたりしているが……。

■委員：各町民会議も非常に動いていて色んなことをやっている。長島町では 2、3 百人の小学生向けのワークショップをしたり、中学生を連れて裁判所で裁判の傍聴をしたり検察庁に行ったりした。各町内で町民会議は動いている。そのもう一つ下の人が動いてない。この文言は消してほしいぐらいだ。

■事務局：外国人の件。恵那市の人口は 8 月 1 日現在 4 万 4754 人。うち外国人 1378 人、うち 18 歳未満 84 名。外国人だけの世帯がどれぐらいかはここからは分からない。

■委員：患者で外国籍の親子は日々増えている。あまりにも増えているので、健幸推進課、保健センターに確認したら、令和 7 年度の出生数が 197 で、そのうち外国籍の子が 20 人ぐらいいる。1 割。その中の半分は日本語がほぼ話せなかった。症状を聞くのも大変な親が半分ぐらいいた。

■委員：青少年育成市民会議で各部会で会議をやっているところで、子どもを持つ親が来て、恵那市の不登校率が高いのではないかと、それと不登校の子が行ける場所をもっと教えてほしいと。青少年の方で広報しようかと思ったが、はなのきなどの紹介はできるが、私立のフリースクールは青少年の広報ではお知らせができない。実は委員はそういうところがもっと気軽に分かるような仕組み、フリースクールで家にこもらずどこかに居場所があるというところで、そういうことをもっと出してほしいという意見が出た。その辺はどうか。

■教育委員会事務局長：フリースクールは私立で、教育委員会としてここにありますというのは私立だとちょっと難しい。市の事業としてやっているものはお知らせできるが。今の時点で「できる」とは言えない。

■議長（委員長）：そういうことの受け皿はどうやったらいいのか。

■学校教育課課長：はなのきとむつみを現在教育委員会として用意している。現状は、昨年度末で不登校件数が 92 件でうち小学生が 37、中学校が 55。そのうち、はなのきに通っているのが 12 名、むつみが 6 名。少ない。通う申請は受け付けているので、こうい

うところを第一に検討してもらいたい。

■委員：難しいことは承知の上だが、親の立場からは、はなのき、むつみに行けない子が行ける場所が知りたいという思いがあることは分かっていたが、それを広報できないかと青少年にぶつけられた。が、私立を宣伝することになるので載せられないということで、教育委員会に繋げる QR コードを載せてそれで聞いてもらうことにした。不登校のことが委員には切実だ。92 件というのは少なくない。不登校の子の居場所づくりをもう少し進めてほしい。

■委員：私も不登校対策はこれからすごく大事だと思う。子どもの数が減るけど不登校の数が増えていく。これから増えていくので対策しないといけないと思っている。恵那市の不登校対策として、むつみ学級、電話相談、地域との連携というのがある。フリースクールに通うにしても、ただじゃない。私の地区の近くで母子家庭で小学校 5 年生の女子が不登校になりかけている。直接その母親には入っていけない。今は学校ですごく対応してくれていて子どもがたまに行ったりしている。フリースクールはお金がかかることが分かり、母親は子どもを一人においておけないので仕事を休む。それでお金がかると経済的な負担が大きくなる。フリースクールに通う補助金は恵那市にあるか。

■事務局 調べる。

■委員：はなのきもむつみも無料では？

■事務局：無料だ。

■事務局：給食がないのでそれが負担になると思う。授業自体は特にお金は要らない。

■委員：一般の個人がやっているところはお金がかかる。岩村のとか。高い。なかなか通わせられない。

■委員：不登校 92 人のうち 18 人しか行けてない。あとの子たちはどうしているのか。家庭的に大変なのでこの辺りを調べておいてほしい。フリースクールがどれくらい要るのかとか。公立のところに行けない人でも、どうにか通い出したら就職ができている人もいる。口コミで行っているのだと思うが、そこを公にできないのであれば何らかの方法で広報するといい。不登校を一人でも少なくするにはそういうことも大事だと思う。

■委員：うちは子どもが小さいので学校やこども園にまだ楽しんで行っているが、子どもが大きくなれば不登校などの話が出てくると思う。僕の中では子どもが不登校になるということはピンと来てないが、不登校になるには理由があると思う。大半の原因を参考までに聞きたい。僕の時代にはまだ少なかった。スマホができて多様化してきて徐々に増えてきた気がする。顔の见えない知り合いが増えたとか。そういうことが理由ならそっちの対策をすとか。フリースクールも大事だがその前にやることがある気がする。

■委員：決定的な理由はないと思うが、武並小学校のフリースクールに通っている子は、元々コミュニケーション能力が低く、自分からフリースクールに、小学校のカリキュラ

ムで時間割で一律の学習をするのではなく、自分でスケジュールを組んで勉強するということで行っている。もう一人は、学校に来るが教室に入れない子で、この子の上の子もそうで、はっきりした理由は分からないが、皆と同じようにやれなかったり分からないと言えなかったりということが重なって、来たり来なかったりしている。ゲームで昼夜逆転して昼間に登校できない子もいる。人間関係のトラブルがあった後、学校に行けなくなった場合もある。子どもの事情、家庭環境など様々な理由がある。学校としてはそういうことを聞き出してどうしたらいいか考えている。学校では手に負えない場合はスクールカウンセラーや蜂谷先生や教育委員会の先生方に相談する。いろいろな大人が入って相談している。昔はなかったメディアが入り依存もあるし、みんなとわいわい遊ぶ経験も昔と比べると不足している。家庭内にそういう子がいると下の子には行けと言いつらいこともある。家の人の働く時間の関係で子どもの登校時間が遅れることもある。

■委員：情報提供。大湫の児童精神科の関先生に毎年来ていただいて話を聞く。不登校に関して 10 年以上のデータを持っている。完全な臨床データ。それだけのデータを持っている人はあまりいないと思う。関先生によると、不登校でも家庭に問題がない場合は何ら問題なく社会人になっていく。もしかするとこの 90 数人は氷山の一角。不登校の定義が厳しい。不登校気味の子がたくさんいるのではないか。それをどうするか。「不登校気味」と捉えることが重要。あと、10 年 20 年位前からデンマークではセカンドスクールを作った。最初からどちらに行ってもいい。そうしたらいじめが一切なくなった。もう一つ。青少年育成について。私は今三郷の自治連合会の会長をやっているが、とにかく役が多すぎる。三郷では、青少年育成と三学がほぼ一体。三学なのか青少年育成なのかよく分からない企画がされている。それはそれで活発にやっている。ただ、私も青少年育成の会長をしていたとき、懇親会の席上で、そのときまだ「健全育成」と言っていたので「青少年は元々健全であり中高年健全育成とした方がいいのでは」と冗談で言った。そもそも青少年育成は大元は悪書追放からスタートした。小泉政権のとき「全国なんとか会議」をやめた。ところが県はなかなかやめられない。当初の悪書追放に匹敵するのは SNS だと思う。既にオーストラリア、イギリス、フランス、スペイン、インドネシア、アラブ諸国連邦では 15、16 歳未満は禁止するという法律ができている。それも踏まえ、現状の青少年育成はプラスアルファでもっと何かやろうという方向性が強いと思うが、原点に返って、SNS を何とかする動きが出るといいと思う。

■議長（委員長）：議事の承認を求める。議題 1 から 4 について承認いただける方は挙手をお願いします。

〔 全員挙手 〕

■議長（委員長）：全員挙手の全会一致で議事は承認された。これから一言ずつ意見を頂く。資料を基に今後の子育て支援策について伺う。

■委員：元々社協のソーシャルワークをやってきたが4月から児童に戻ったとき、子どもたちは相変わらず元気で楽しそうに遊んでいると思った。が、不登校への対策については、社協と児童センターが何かできると、少し考えていきたいと思っていた。今回皆さんの話を聞き、例えば児童センターははなのきのような教室ではないし、小学生以上は子どもだけで来ていいので、学校へ行けない子の日常の居場所として児童センターを、旧恵那市にしかないので、使っていただけるようなピーアールに頑張りたい。不登校。学校へ行けない子の家庭的な要因は、こども家庭庁は子どものソーシャルワーカーの設置を進めてきているので、そういうところへのアンテナを福祉業界も持ち、苦労している保護者も包み込めるようなことを考えていきたい。

■委員：こども発達センターに私は勤めている。10年以上前に私が入職したときと比べると、児童発達センターの中のその割合としても、未就学児の子と学童の子の割合が、放課後等デイサービスという小学生が使うサービスの割合が増えてきている。それまでは児童へのケアが周りから見ても大事だったのかもしれないが、今は小学生の子も学校だけに任せず福祉サービス、教育と福祉が協働しながら支えていくようになっていることを強く感じる。不登校の子や居場所を見つけにくい子、潜在的に家にいて表には出てきにくい子が多分たくさんいるので、そういう子が声を出しやすい場所を作ったり、相談する場はたくさんあるが、心理士のような専門職は少ないのでそういう人の配置も進められるといい。

■委員：この計画評価の冒頭に、「学童期・思春期、青年期での」と書いてある。この会議自体ややもすると子どもを妊娠してから小学校ぐらいまでが中心の議題だと思う。そこがシームレスにならない非常に大きな問題。数年前恵那市が行なったデータを見ても、将来恵那市に住みたい、あるいは恵那市で働きたいという人が高2では30数%ぐらいしかいない。これは最大の問題。ぜひ、次回からというわけにはいかないかもしれないが、ここで中学とか高校の先生方の意見を聞きたい。高校は県立なので難しいかもしれないが、そういう機会があると本当に思春期、あるいは青年期の子が何を考えているか少し分かると思う。

■委員：SNSの問題は青少年でも大きく捉えている。本年度の市民全体向けの講演会が、『スマホを見てただけなのに』という本を書いた瑞浪の加藤ゆうやさんを招く。スマホを取り上げることはできない。中学校の新1年生は100パーセントスマホを持っているので。スマホとどう付き合うかというようなことを講演いただく。11月1日。ぜひ参加してほしい。もう一つ。中学の地域クラブ化がされた。運動部はそこそこ動いているが、ブラスは活動場所がない。家庭科手作り部、美術部、文化部が辛いという意見が出

ている。この辺もどう取り組むか。子どもがやりたいことがやれない状態にある。教育委員会が中心になり考えていただきたい。

■委員：資料 4 (4) 「体験・交流・キャリア教育」で、商工会議所として地元企業のピーアールはしたい。文化部、5 月の恵那まちなか市で西中のブラスバンドが今年から変わり、出たいという話があった。地域イベントと文化部、東小の手作り部は伝統的にまちなか市に出ているが、ほかの学校にもピーアールしたい。

■委員：一つは不登校。地域クラブ、私も多治見市の地域クラブの指導員をやっている。毎週土日。小学校、中学校の子どもに卓球を教えている。2 年位前に中学校を卒業した生徒が、ずっと毎週土日に必ず来る子で、本当に上手になり、よく頑張ったねと話をしたとき、母親から「学校には来れなかったけどクラブには来れた」と涙ながらにお礼を言われた。その子は今、中京の通信教育に行っている。結局、居場所が大事。居場所を作るのが大事なのでぜひ取り組んでいただきたい。

もう一つ。出生の子の 1 割が外国人ということでもがく然とした。私たちは労働組合の代表。外国人労働者はどこの町でも増えている。恵那市でも増えてきたことを再認識できた。子どもへの日本語教育、親に向けても含めて、恵那市の企業、中津川市の企業、恵那市に住んでいる外国籍の人たち、いる以上は企業と協力して日本語教育はやってほしい。市だけが責任を感じる必要はない。必要だから入れている外国人労働者なので。労働組合の立場では、ほとんどの企業に労働組合がないので、外国人労働者の気持ち、意見を反映することは難しいので、雇用している側が責任を持って、市と協力してやる形になればいいと思う。

■委員：長島二葉こども園では外国の人の子が 5% ぐらい。両親ともに外国人で、持ち物や食べるものが基本的に違ったり、宗教上の理由で食べないということを言う人があり、どう進めるか幼児教育課と相談している。そういう人たちもまるごと支援していけたらいいが、日本語が通じず担任も苦労したり翻訳アプリを使ったりしている。お便りも、外国籍の人はスマホで訳して中身は分かっているが、外国人が増えてきたという印象はある。

もう一点。家庭で子育てに不安を感じていて、親が仕事をしてないからこども園に未満児では入れられないというケースが増えている。一時保育では家庭で不安を感じているところは子育てと連携して一時保育できるようにということで支援している。子どもを持っているが人と繋がれなくて不安というところが多いと思う。これからは家庭まるごと支援みたいなのがこども園の担う役割になると思う。小さいときに支援をしてあげて、自分で生きる力を育てることで、大きくなってからの不登校も少し頑張れるところを育てていきたい。自分のやりたいことができ、言えて、自分から発信できる子にすることをこども園で担っていきたい。

- 委員：資料2のライフステージ別の目指す姿。小学校はふるさと学習を、伝統芸能や、環境を通じてやっているが、武並小学校は防災を重点にしているが、コミュニティスクール、消防団、行政と協力して今年度防災士を受験する子を育成する。学校の学びと地域での学びと恵那市防災アカデミーに協力してもらい、児童128人のうち6人が防災士を受けるように1学期から学んだ。不登校などいろいろ問題はあるが、子どもたちが学校に来て、自分が好きなこと、興味があることを、勉強や活動や仲間と遊ぶことなどいろんなところから見つけ、しかも学校の先生だけに褒められ声をかけられるのではなく、地域の人や外部の人たちに「頑張ってるね」と声をかけていただく機会を増やすよう、心身ともに元気に成長していける子を育てる開かれた学校を恵那市全小学校は作る努力をしていると思っている。
- 委員：資料3の3ページ。通年型クラブ13校区。市内全部の小学校に学童保育があるが、とても小さいところがある。全部で5人とか。そうすると、その運用はとても大変。その運用を助けてあげられないか考える。いくつかの学童保育を運営していくという形もこれから必要になる気もする。大井学童保育は127人の子どもがいて、第4学童も今年度から開設できる。多目的室に壁を作ってもらったので。今までそこに60人いて、壁によって30人30人になったらとても落ち着いた。場所は大事だ。落ち着いたところができるといいと思う。岩村の学童保育は念願叶いやっと小学校に入れた。夏過ぎから始まるので楽しみだ。待機児童が0人。運営を担当者に頑張ってもらったので恵那市の学童保育は充実していて有り難い。
- 委員：私の園は今年度より認定こども園として新たなスタートを切った。こども園移行に関しても皆さんのお力添えを頂いて無事開園することができた。今まで3歳児からだったのが1歳児からの受け入れになった。小さな子を抱えながら皆さん仕事と子育ての両立を一生懸命やってみえと思った。自分が子育てをしていた頃、3歳までは家で見てその後入園させる流れが多かった。子育てを取り巻く環境も本当に大きく変わっていると痛感する。だからこそ、負担や不安ばかりではなく、子育てが楽しいと感じていただけのような園でありたいし、地域の皆さんと一緒に保護者を支えていきたい。
- 委員：不登校に繋がることで。実は大学でも教室に入れないとか友達と一緒にいないと授業を受けられない子も増えてきた。ちょっと違う時代に入ったという気がする。自分の居場所が確保できないと授業を受けられない。「絶対後ろじゃないと。すぐ外へ出れるとこじゃないと」という学生がいる。私、保育の内容が専門なので、学生たちと一緒に遊ぶという授業を行うのだが、遊びと一緒にできない。友達と一緒に遊ぶ楽しさが共有できない。私は遊びということに関心を持っていろんな研究をしたり、ゼミでも今ずっと体を使った遊びを学生と一緒に研究しているが、もしかしたら、この子たちもそうだが、小学校の時から体を使って遊んでいない。部屋でずっと閉じこもっている子たち

が多く、遊びの内容を聞いても言葉がすぐに出てこない。しかも、自転車とか一輪車とかで1人2人で遊んでいる。その中で、私も現場に行ったが、保育園の中で遊ぶとか遊び込むとか、集中して遊ぶという、本当にそういうことができているんだろうかとすごく心配だ。それと同時に異年齢保育を研究しているが、今一緒に研究している方が過疎地の保育園で異年齢保育をやっているところを研究している。異年齢の良さはいろいろあるが、居場所づくりというのが一番大切。どの子にとっても居場所が見つかりやすいというのが異年齢の利点。特に、仕方なく異年齢をやっているところから、あえて異年齢を行い地域の方や学童保育を巻き込んで地域ぐるみで保育を作っていく事例を聞くと、今小学校の子たち、不登校の子たち、不登校になる前の子もそうだが、楽しく遊ぶとか、自分の居場所がある、安心して遊ぶことができる、じっくり遊ぶことができる場所を恵那でも作る必要があると今話を聞きながら思った。大きな話だが、教育で保幼小連携が出ているが、居場所づくりのところで保幼小連携、もっと中学校、高校も含めて、考えるべき大きなテーマだと思う。保育園でも不登校の子がしばらく来て一緒に子どもと遊ぶ、乳児と遊ぶと、自分の場所を見つけたかのようにいきいきする。この前見てきたが、中学校の職場体験で1歳児をみる、5歳児をみる、みんなでフルーツバスケットごっこをする。それは面白い。遊び方も考えたり、そういうエッセンスも含め、年齢を超えて居場所ができるといい。ここにも異年齢が書いてあるが、また今後教えてください。

それと、外国にルーツがある子どもも増えている。いろんな場所で。名古屋の保育園で外国のルーツがある子どもが増えていて、そこの実践が面白い。給食室の周りにいろんな国々の食事例があって、それを給食にしている。子どもたちがいろんな国の文化を知ることがすごく生きている。日本の文化を調べるのは大事かもしれないが、外国のことを知っていくことが必要なんじゃないか。誰でも通学制度でそれが出てこないが、今どういう状況になっているか今度教えてほしい。

- 委員：今、私が知っている限りで、例えば農高の生徒が給食献立を作って、食を小学校で授業をやったり、恵那高の生徒が小学校で授業をしたりしている。地元への定着が4割切れたときに高校の先生方はとても危機感を持たれて、そういうのをどんどん始めている。行政としては市と県だと難しいのかと思うが、もっと広報したり応援したりしてもいい。それから、赤ちゃんの保護者の応援は、日々必要性がすごい。昔、鬼アプリというのがあった。アプリで鬼を呼んできて、言うこと聞かないと鬼を呼んで、鬼を見て言うこと聞くというのがすごく流行った。そのときに、急におねしょをするようになったとか、鬼ばかりやられることでプレッシャーになって、ビビるどころか混乱する赤ちゃんや小さい子が増えて大変振り回されたことがあった。今、その流れはどんどん進んでいる。セルフ飲みホルダーというのがあって、ホルダーに哺乳瓶がくっついていて一人で飲むものが爆売れしている。そこに色がカラフルだったりクマがついていたり。そんな

ことじゃないっていう話なんだけど、そういう子育てがロコミで「便利」とか、それでミルク飲ませて「今日は1回抱っこしたかな」みたいな保護者がちょこちょこあって、大変な危機感がある。そういったものはやっぱり子育て応援団が、今ちょっと入り込めないが、家庭へということをおっしゃるが、本当に喫緊に応援団がものすごく必要になっているという子育て事情の現状を知っていただきたい。

不登校は昔からあるが、令和になってからガラッと変わって増えてきたのが SNS に関すること。ロックダウンして、うちにいるんだと。学校行かなくてもいいかと。今でも休んでいる子とか、別室で一人だけ授業を飛ばしてもらって授業を受けている子もある。そういう形でいいんだと。それも多様性でいいが、登校のハードルが令和になってから低くなったと痛感している。そこで忘れていけないいけないのは、はなのき、むつみに行っている子は少ないかもしれないが、その他で相談室、別室、保健室と、一人一人の先生方っていうのはものすごい努力をしている。そのために経験があまりない若い先生が振り回されて、どこまでやっていいんだろうと、心折れて離職している。毎年離職している若い教師が数名いる。せっかく夢を持って教師になったのにという現状がある。校長になっても心折れちゃうことはいっぱいあるが、若い先生は本当に、やっていることが身にならない毎日を過ごしていると心折れるだろうなあと。

保護者の精神疾患が増えた、令和になってから。そのため、不安を煽るように、「それでいいの？ 頭痛くないの？ 大丈夫なの？ 今日行けるの？」みたいに言われり。それより「はい行ってこい。給食ないで行ってこい」ぐらいに言えば行かざるを得ないのだが、不安を煽られる。親との精神、鬱や統合が絡んできている。学校が努力してもなかなか難しいところが令和になってから目立つようになったことを感じている。

最後に、他市に先駆けて恵那市は今年度から5歳児健診を始めている。とにかくやろうと。5歳児健診というのは、不登校を一人でも減らしたいし、見えない貧困、見えない虐待、そういった家庭の中を覗くということ。「学校へ上がるまでの発達障害を見つける」もあるがそれは恵那市では丁寧にやっているのもそれは大きな目標ではなく、支援がどのように要るかというところで準備してきた。これはこども家庭庁からのお達しで全国で始めてくださいということだがなかなかできないのを恵那市がなぜここまで進んできたかという、行政も、おひさまとか虹の家、そういう部署が全然違うところ全部が準備によってまとまったため。連携がすごく深い。保健センター、教育委員会、子育てが。これはすごい。これだけ連携が深くなったのが5歳児健診の一つの効果。これを今後も行政としてぜひ応援していただき、みんなで繋がっていききたい。5歳児健診は1歳半健診とはかなり意味合いが違うということや、恵那市で始まったということを皆さんに知っていただき、何かと違う目で見ずに応援をしていただきたい。

■委員：僕は恵那市こども園保育園保護者連合会の会長だが一人の親でもある。まだ子ど

もが小さいので今頂いた情報がピンと来てない部分もたくさんあるが、これだけの大人がこれだけの情報を集めて子どもたちのためにこんなにも考えて企画する、こういう集まりの場を設けていただいたことに対し、子どもたちは幸せだと思う。僕らの子どもの頃、ゲームもスマホや携帯電話も何もなかった。僕は幼少期東京に住んでおり、恵那の環境とはちょっと違うが、幼少期の遊びは Switch だのゲームだのということとはなかった。地域的なものなのか、むしろ都会の子の方が外で遊んでいたような印象がある。遊び場には、公園もたくさんあったし、マンション全部使って鬼ごっこで遊ぶのが流行っていた。走り回ることがどこでもできた。要は街なかだった。小学5年生でこっちに引っ越してきた途端、みんなとの遊びはゲームになった。どこに遊びに行くにも、その当時あったのはふれあい広場ぐらい。今はないが。そこまで行くのにすごく時間がかかることもあり、友達の庭で遊ぶなりゲームするということだった。うちの親もかなり心配はしていた。不登校では、友達との遊び方の苦手な子がいると思うが、そういった地域性もあり、どちらかというところの方が多いいんじゃないかなと思っている。ちょっと偏見ですけど。誰かこのことを知ってる方はいるか。全体的に東京の方が多いただろうと。ローカルの方が不登校が多いという項目があるのかなと思ったり。今の子どもと当時の子どもは全然時代が違うので、やることなすこと全然違うと思うが、街の子の方が外に出れば何かしら得ることがあって外に出る機会が多いんじゃないかなと。ただ、こっちの子は、例えばうちの子はまだこども園に通っていて一人ではどこかに行けないが、僕が幼少期の頃だったら近所にいくだけでも知り合いがいて勝手に出ていくことは可能だった。周りの目があるので安心して。こっちの子は一步出ると何もない田んぼ道が続いていきなり国道が出てきてかなり危険なので、親も心配でなかなか外には出ていいよとは言えないと思う。そういうのもあり、親も過保護になっている印象がある。今はゲームがある家で遊べる、楽しめるものが増えてきたから、外に出るケースっていうのが減ってきた。学童もすごく近かったのでよく学童保育に遊びに行ったが、恵那市では学童や児童公園まで遊びに行くにはどうしても親の付き添いが要る。市も公園などきれいにしてくれているが、なかなか子どもだけで遊びに行けない。そういう部分でも、不登校になったり出づらい部分があるのかなと思った。

- 副会長：「ライフステージ別の目指す姿」で、「子どもの誕生前から幼児期まで」については、改善の余地はあるにしろ、評価が高い。私も子育て中のお母さんから恵那市の子育て支援がすごく充実していて有り難いという声を聞いた。次は「学童期から思春期」のところに入力していくという方向については大賛成。新聞を読むと、例えば中学校に校内のフリースクールの設置、子どもが住んでいる地域の中学校にこそそういう部屋を作っているということが書かれていた。田舎に住んでいると恵那市内に何かがあってもちょっと行きにくい、親も送っていけない。集まる人数は少ないにしろそこに行けること

が大事だと思う。

もう一つの事例。こども園から小学校に入るときに小1ギャップがあり、それをなくすために低学年向けにわくわくタイムというのを導入して1年生に自由遊びの時間を確保しているという事例もあった。これも一つの方策かなと思う。

もう一つ。不登校の子に給食を提供する取組がどこかの市である。市の実情に合わせていろんな工夫がされている。恵那市でもいろいろ考えて具体的な方策をとっていただきたい。不登校は外国のどこの国でも増加している傾向にあるそうだ。それがコロナ禍の影響があるということだ。

■議長（委員長）：教育委員会、子育て支援の方で何か意見はあるか。

■教育委員会事務局長：今までは私は幼児教育課長としてここに参加していたが、立場が変わり、不登校などの話にもなり、大変だと思った。今日頂いた意見を来年の子育てパッケージの中に少しでも入れたいが、なかなかこれだというのが出てこず、個別に相談に行くかもしれないのでよろしくお願いしたい。

■医療福祉部長：皆さんたくさんのご意見本当にありがとうございました。不登校の話が出てきたときに思い浮かべたのが、相談で、80代の高齢者の方が、子どもが引きこもりだと。小学校のときからずっと引きこもってるが、自分が年を取って年金もなくなって、子どもも収入がない。どうしたらいいかと。何十年もずっと家に引きこもっていることを今想像していた。やはり学校だけではなく、本当にどこかに居場所を作ってあげて、出かける場所があれば少しは改善していけるのかということのを思った。居場所の大切さをすごく考えさせられた会議だった。

■議長（委員長）：6 ページの一番下、「1、負担を減らす」。これは子育てパッケージのところで負担を減らす。「2、成長を支える」「3、夢を育てる」「4、地域で活躍する」となっている。今日の話でいろんな意見を頂いたので、今後の子育て支援策の中で該当するところを事務局にまとめていただき次回に報告してほしい。

次回は成長を支える、夢を育てる、地域で活躍するということの意見を頂きながら、どうしたら子どもが成長していくのか、環境の良い中で育っていくのかをみんなで考えていきたい。

全ての議事が終了したので進行事務局に返す。

5. その他

(1) 恵那中央出張所運営協議会委員の選出について

(2) 恵那市男女共同参画プラン推進委員会委員の選出について

■進行（事務局）：行政の関係する各種委員会からの委員の選出依頼があった。事前に委員長と相談し、（1）恵那中央出張所運営協議会委員は、加藤洋子委員、（2）恵那市男女共同参画プラン推進委員会委員には安田和枝委員にお願いすることになった。

6. 閉会のあいさつ（副委員長）

■進行（事務局）：最後に加藤副委員長から閉会の挨拶をお願いします。

■副委員長：皆さんそれぞれの立場から大変貴重な意見を頂いた。私も自分のことしか分からないので勉強になった。教育委員会、事務局の皆さん、今後もよろしくお願いします。

■進行（事務局）：次回は10月頃を予定している。事前に手紙で案内する。

〔 閉 会 〕